

十三歳の私と僕

沖縄県立開邦中学校二年 宮城 日南子

カーテンから差し込む
あたたかな光
小鳥のさえずりで目を覚ます
今日は何をしよう
学校で何を話そう
毎朝、期待で胸を高鳴らす
十三歳の私

窓から差し込む
強い光
サイレンの音で目を覚ます
どこに逃げよう
今日も生きられるのかな
毎朝不安で胸が高鳴る
十三歳の僕

澄んだ青い空
うるさいくらいにセミが鳴く
デイゴの花に蝶がとまる
そんな通学路を
友と足並み揃えて歩く
十三歳の私

黒くよんだ空
聞こえるのは爆撃音と叫び声
虫は鳴かない
花も咲かない
通学路であつたはずの道を
一人ひたむきに走り行く
十三歳の僕

「みなさんの夢はなんですか」
授業で問われ
夢が見つからず悩んでいる
十三歳の私

「みなさんは国のために戦うのです」
学校で教わった
僕の夢は兵隊さんだと
選抜肢なんてない
十三歳の僕

母に話した
「将来何がしたいかわからない」
母は言う
「どうして決まってるの
早く考えなさい」
夢がないから怒られた
十三歳の私

母に話した
「将来お医者さんになりたい」
母に言われた
「どうして夢を持つのか？
国のために戦う
それが私達国民」

夢があるから怒られた
十三歳の僕

七十九年前
たくさんの命が奪われた
生まれたばかりの赤子、
小さい子供、学生、
大人、おじいおばあ
みんな夢と希望を持って
でも、戦争はそれ奪った

夢を持つのも人間
それ奪ったのも人間
かっつのは過ちを繰り返さな
私たちに何ができるだろう

今を生きる私達
平成、令和、時が流れていく
戦争を知らない人が増えていく
戦争を知っている人が減っていく
あの日、あの時、人が減っていく
何もかもを奪われた人が
それでも明日を信じて

今がある
私たちが
あの日、生きられなかった人がいた
明日のために
生きなければならぬ

今を生きる私達
平和について考えなければならぬ
平和と同時に戦争を学ぶ
でも、戦争があるから平和がある、と
極端に夢を捨ててはならない
誰もが夢を持ち
希望に満ちた眼差しで
明日を見つめる
そんな平和な毎日が
当たり前であるはずなのだ

今を生きる私
前を向いて生きよう
あの時、
十三歳の僕が叶えられなかった夢を
生きられなかった明日を
私が夢を持って歩き続けて
思いをつないでいく
一人一人の思いが大切だ

戦争は平和でないと語れない
戦争の悲惨さを伝えていきける
平和な未来を築いていきける
そんな世の中にしていきたい